生涯学習・社会教育学研究　第28号　2003年

米国における祖父母教育と祖父母同士のサポート・グループ

――親役割の代行に伴う課題解決に向けて――

間　野　百　子*

Grandparent Education and Support Groups among Grandparents in the United States : Towards Overcoming Challenges in Playing Parents' Role.

Momoko MANO

With the advancement of aging society, it has become increasingly important to expand supportive networks for the aged in order to meet their diverse needs, demands, and problems.

Particularly, in the United States, it has become a social issue that the number of grandparents who are forced to assume full responsibilities for raising grandchildren has been growing rapidly. Finding themselves placed in this new unexpected role, most grandparents are confronted with social disadvantages or emotional stresses.

This paper aims to clarify supportive ways to encourage such grandparents from the viewpoints of educational as well as group approaches. Through these approaches, I will demonstrate that Grandparent Education can provide them with informational assistances, and support groups can provide them with emotional ones, thereby helping them fulfill the new roles.

目次

はじめに
I　祖父母役割の復活をめぐる社会的背景と課題
II　祖父母たちへの教育的アプローチ
　A　祖父母教育とは
　B　祖父母教育の内容
III　祖父母同士のサポート・グループ
　A　サポート・グループの特徴
　B　「祖父母の会」(Grandparents As Parents) の活動
IV　考察―祖父母教育とサポート・グループの可能性
おわりに―今後の課題

はじめに

高齢化社会は，高齢者の多様なニーズの把握と課題の解決に向けた対策を必要とする。少子・高齢化社会の進展は，同時に親子関係の長期化，家族形態の多様化などの家族変動をもたらしている。従来の三世代間の関係性と顕著に異なる新たな現象として，中間世代（親世代）の諸問題により，祖父母世代に求められる家族内役割が変化していることが挙げられる。こうした三世代の親子関係の変化に言及した研究蓄積はいまだに少ない[1]が，祖父母同士の自発的な相互扶助活動は既に活発になっている。

本論では，こうした家族変動により急増中の「世代間家族」"連続しない二世代の構成員が同居している家族"[2]における祖父母の役割に着目する。特に米国では，1980年代半ば以降，親世代のトラブルが引き金となり孫の養育責任を全面的に負う祖父母たちの急増[3]が問題視されている。加齢に伴い異質性を増す高齢者の抱える心理的課題や社会的ニーズも一律的な基準に基づくサポート体制では対応できないほど多様化している。その一方で，行政主導による実態に即した適切な対策の不備や遅れが指摘されている[4]。

本論では，米国における祖父母に対する取り組みを課題解決に向けた民間主導のモデルとして着目し，以下の点を明らかにすることを目的とする。大学を主軸とする

＊生涯教育計画コース　博士課程２年

研究機関が試みている祖父母に対する教育的アプローチの内容ならびに，民間レベルで自主的に立ち上げられたサポート・グループがサポートの質の向上や改善を政策提言に結び付けようと尽力している[5]点である。

ライフサイクル上，社会や家庭における自己役割の「縮小」や「喪失」を経験する高齢者にとって，縮小した自己の存在と役割に適応していくことが高齢期の課題の一つとなる[6]。一方，本論で取り上げる祖父母たちは，高齢に達してから重要な役割と責任を「獲得」することにより人生設計の変更を強いられる。祖父母たちは，新たな役割の獲得により次の三点の特性を具備した高齢者となる。①第三世代（孫世代）の養育・教育の責任と義務を全面的に負う。②新たな役割の遂行にあたりストレスや不安を溜め込み，孤立しやすい。③社会保障上不利益な立場に立たされる。

変容する家族関係に呼応して，高齢者の心身の健康と青少年の健全な社会的・精神的発達の保障のためにもこの新たな現象への取り組みが緊急の課題といえる。家族の危機・解体という「社会病理」が日本より早期に顕在化している米国における民間主導型の祖父母たちへのアプローチの手法から学ぶ意義は多大である。

本論では，以上の問題意識を踏まえて，中間世代の死亡または諸問題により孫の世話を「養育責任のある祖父母」として引き受けることとなった祖父母たちを対象とし，Ⅰ章で環境の急変がもたらす問題，課題について明らかにする。その上で，こうした特別な役割の遂行に必要なサポートの手法を教育的および集団的アプローチの視点から分析する。分析にあたり，Ⅱ章では孫世代の教育役割を円滑に進めていくための「祖父母教育」をⅢ章では同質の課題解決に向けて急増している祖父母同士のサポート・グループの展開を検討していく。

Ⅰ　祖父母役割の復活をめぐる社会的背景と課題

家族内における高齢者は，1970年代の米国においてもいまだにサポートの一方的な受け手と一般的にみなされていた[7]。

しかし，1980年代後半から祖父母が孫の親権者として親の代行を余儀なくされる率が急増している。祖父母は，「フル・タイム」型（①終日孫の世話をする義務があり，同居しているケース②さらに，親権も確保し，孫の養育に法的責任を有するケース）と「ディ・ケア」型（両親の不在中のみ手助けをする）に分けられる[8]。

「フル・タイム」型の祖父母たちを対象とした質的調査によると，主要なストレス要因として“自分の子どもたちとの関係，親の代理人となること，そして法的問題”が挙げられている[9]。

こうした現象が生じている背景には，「親が家庭で子どもを養育する」という家庭が本来有する機能が低下した結果，親不在または子どもの養育困難に陥っている家庭の増加が考えられる。子どもの養育義務を親が実質上果たせない「非機能家族」の中，“約三分の一にあたる家庭が両親共に不在である”という[10]。現在米国で親が子どもの養育義務を果たせなくなる原因は，親の死亡，離婚，幼児虐待，HIV/AIDS感染，薬物依存，犯罪による投獄，逃亡，家庭内暴力さらに失職など多岐に渡るが，最大の要因は薬物依存症であるという[11]。

20世紀中頃までは，典型的・理想的とされる「伝統的家族」（両親に複数の子どもたち）の形態が存在した。一方，現代社会における家族形態は，シングルマザー，同性のカップル，再婚，そして養父母など多様性に富んでいる[12]。しかし，社会や家庭の状況がいかに変遷しようとも青少年の心身の健全な発達にとって従来同様の家族の果たしてきた機能が必要であることに変わりはない。

地理的・物理的に離れて暮らし，孫との関係が補完的・間接的な「デイ・タイム」型の祖父母にとっては，孫との交流が精神的に好影響をもたらしうる。

他方，突如孫の親権者となる場合は，親自身が問題行動を起こした上に経済的にも厳しいケースが多く，祖父母が孫の全面的・直接的な教育および養育責任を負うためストレスや問題を抱えがちとなる。

実際にこうした立場に置かれた祖父母たちは，孫との関係においてどのような危惧を感じているのだろうか。以下，彼らが直面する課題と現状について概観する。

高齢者にとって生活空間であるコミュニティまたは家庭において誇りを持って遂行できる役割を有することは，自己充足感につながろう。1970年代，高齢期における「社会的役割」に着目したI. ロソーは，“老年期への移行は，大きな社会的喪失をもたらす。それには中枢的役割および，老人の責任，権威，報酬などの喪失も含まれる。最後に，そのような喪失に対する用意もなく，また新しい規範，責任，権利といったものに代わるものもないので，そこには基本的な役割の不連続性がみられる。”と指摘し，高齢期における新たな自己役割への移行，そして適応が円滑に進まない実態を浮き彫りにしている[13]。

祖父母たちは，みずからの子どもの死に対する喪失感や薬物依存や犯罪に手を染めてしまったことへの罪悪感にさいなまれる。同時に目の前に佇む精神的に不安定な孫との狭間に立たされ，不安感が増長していく。祖父母たちがこうした立場に突然置かれたことに戸惑いを覚えるのは当然のことであろう。こうした背景を受けて，1980年代初頭から「祖父母教育」を実践しているロバート・ストロム（Robert D. Strom）らの祖父母の心理状態に関

する調査結果によると，“彼らに共通する否定的感情として，こうした状況を招いた自分の息子や娘に対する憤慨，みずからが誤った子育てをしてしまったかもしれないという罪悪感，二度目の子育てを上手くこなす能力があるかという不安感”などが挙げられている。さらに“孫への哀れみ，自分たちの悩みを友人に理解してもらえない疎外感，退職後の目標の変更に伴う憂鬱な気持ち”[14]なども報告されている。

このように精神的に不安定でストレスの多い中，公的サポートを希望しても精神障害の認定を受けないかぎりサービスの対象外となってしまう。多くのケースが精神病には該当しない「グリーフ」“感情的にかなり追いつめられ，肉体的，精神的健康が不安定な状態”[15]に当たるため周囲の理解とサポートが必要不可欠となってくる。

親権者となる祖父母の約四分の一が地方に居住しているため，特に閉鎖的なコミュニティでは，都市部の同輩と比べると失望的な感情を持ちやすく必要な社会サービスも受け難い状況に甘んじている[16]。

さらに，孫の親権確保に伴う教育責任，養育義務の遂行に必要な社会支援も養父母のケースと異なり不十分である。

学校との関係では，学業上の後れや問題行動を起こしがちな孫が多いため教師側とのコミュニケーションも必要となる。孫のために学校行事等に参加しても若い親世代との意思疎通に苦慮し，居場所を見失いがちとなろう。

このように，高齢に達してから予期せぬ役割を獲得したことで精神的・社会的に困難な状況に陥ってしまう祖父母たちのニーズに応えていくサポート体制の整備が緊急の課題であるといえる。以下，II章では，こうした祖父母たちへの教育的アプローチを具体的に検討していく。

II　祖父母たちへの教育的アプローチ

A　祖父母教育とは

青少年の人格や価値観の形成を育む第一義的な集団は本来家庭である。青少年は，“両親の姿を無意識の内にみずからの行動パターンのモデルにしている”という[17]。親のトラブルの影響を受け，身近な役割モデルを見失っている青少年に対してその役割の補完・遂行を求められているのが祖父母たちであり，青少年の健全な発達過程に不可欠な役割を担うこととなる。

こうした重責を高齢期に負う祖父母たちは，“90年代の世代間関係の主要なトピック”の対象となり，“研究者たちは，ペアレンティング・プロセスとストレスに満ちた新たな役割を突然引き受けさせられた祖父母たちが受ける影響について解明しようと試みている”[18]。ペアレンティング・プロセスには祖父母と孫との長期的・直接的関係性の中で克服されるべき課題や彼らの社会的・心理的状態の把握が含まれると考える。

ロバート・ストロムとシャーリー・ストロム（Shirley K. Strom）はこうした家族状況の変容に呼応した「祖父母教育」の必要性を唱え，長期プロジェクトとして「グランドペアレンティング・クラス」を大学（州立アリゾナ大学）を拠点として開講してきた。「祖父母教育」とは，“孫との緊密な関係性を構築し，より未来志向となるために効果的な方法を明示する教育的介入”[19]を指す。教育の目的として，“精神衛生，家族の調和，そして世代間理解の一助となる学習の機会を設けること”[20]を掲げている。ストロムらは，カリキュラム開発，クラス開催，グループリーダー向けマニュアルの編纂など多領域に渡って祖父母教育を推進している[21]。また個別具体的な状況に対処しうるケース別マニュアルも考案されている[22]。

こうした新しい教育的概念と実践が生じてきた背景として，核家族化などの進展により世代間ギャップが広がる中で，祖父母が再度家庭内の教育主体としての責務を果たすための新たな学習機会の必要性が考えられる。

B　祖父母教育の内容

祖父母教育では，祖父母たちに特有の問題を克服していく秘訣として“楽観性，新たな役割への適応，現代社会における青少年の発達に関する理解，孫の両親との協力，孫の社会的・学業的達成度の検討，可能なサービスやみずからの責任ならびに権利の認識，さらに祖父母役割から定期的に解放される時間の確保”を掲げている[23]。

祖父母が新たな役割に適応し，祖父母と孫双方にとって円満な人間関係を構築するための方法論を，ストロムらの「祖父母教育」の実践[24]の中で特に重要と考える「他世代理解の促進」と「孫との円滑なコミュニケーション・スキルの育成」に焦点を絞り検討を試みる。

①　他世代理解の促進

祖父母たちは，自身の青少年期または子育て時の価値観や常識を現在の青少年の養育に直接適用できないことを自覚せねばならない。また，子育てを上手くこなしている親から学ぶ姿勢も大切である。孫世代の現状認識を深めるには，青少年の成育の拠点となる家庭や社会の実情をまず知る必要がある。

家庭や成育するコミュニティの「きずな」が健在であった頃と比べると，現在の米国の青少年は家庭，学校，そしてコミュニティにおいて，孤立感・疎外感を高めている。家庭は，青少年の心身の健全な発達と社会化に必要な社会最小の単位である。しかし，米国では青少年の成長を支えていく周囲の大人の心遣いや慈しみがますます

失われてしまっているという[25]。

コミュニティ，家族そして個人との相互作用に着目しているマクレアらは，“あるコミュニティの形態が変化し始めると，そこでの家族形態もまた変化していく。基本的な家族構造が変わると，家族のメンバーの基礎的なニーズに応じる能力も低下しがちである”[26]と指摘し，家族という単位が周囲の環境の変化に影響されやすいことの危険性を示唆している。親が家庭で子どもと接触する時間が減少し，拡大家族の激減により家庭内に存在する大人の人数自体も減少している[27]。そうした中，高齢者が有する智恵と経験を再度活用し，次代を担う青少年へ身近な大人の役割モデルを示す意義は多大である。このような家族機能の変容，または低下という状況の補完，再生，代行を企図して米国で成立し，体系化が進められている「世代間プログラム」では，青少年と高齢者の相互補完的な関係が両世代に効用性をもたらすと提唱されている[28]。

特に祖父母が面倒をみる孫たちの大半が家庭で十分な愛情や注意を受けずに成育しているため大人に対する不信感や自己疎外感，そして将来への不安などを抱えていることに配慮する必要がある。さらに，孫も自分の家庭状況が友人と異なることに劣等感を感じたり，学友のからかいの対象となっている恐れもある。孫たちも祖父母と同様に葛藤を内面化し，ストレスを溜め込むことが，問題行動の牽引ともなりうる。青少年を取り巻く周囲の現状と孫の直面している現実を客観視することは，祖父母たちの新たな役割に対する責任と重要性を再認識する契機となろう。こうした情報や知識の入手が祖父母教育の第一歩といえよう。その上で，家庭での孫との対話を円滑に運び，相互の信頼関係を育むことが次のステップとなる。

② 孫との円滑なコミュニケーション・スキルの修得

世代間理解の促進，とりわけ孫とのコミュニケーションを円滑に運ぶために最も重要なスキルは孫に「適切な質問をすること」である。ストロムらの「祖父母教育」の実践マニュアルを参考にすると，孫との意思疎通に有効な方法として「テレビの共同観賞」と「話し方の向上」を挙げている。祖父母は孫の指導的立場でもあるため，まず孫の話しの聞き手となることが重要である。常に孫に先に何かを言わせようとすることが祖父母と孫の意思疎通を困難にしている。孫の経験を尊重する質問をすると適切な応答を引き出すことが可能となる。ストロムらは，そうした質問を可能とする具体的な方法として，上述の2点を提案している。「テレビの共同観賞」により孫世代の価値規範や環境を知り，「話し方の向上」に関しては，孫の関心の高い家族のルーツや両親が10代前半の頃の話しをすると効果的であるという[29]。

こうしたストロムらの教育的・意図的働きかけを通して祖父母たちのコミュニケーション能力を高め，孫たちとのより円滑な人間関係の構築に役立てようという姿勢には，高齢者も新たな環境に対処しうる学習主体であるという生涯発達観と孫世代の理解を深めることが高齢者自身の生活の質向上に寄与するという理念が見受けられる。

孫の養育に関する助言を親に受け入れてもらえず疎外感を味わう祖父母の多いなかで，家庭や社会において明確な責任や役割を一任されることは，自己充足感につながりうる。しかし，その一方で，予想外の重責が祖父母たちに精神的・肉体的な負担を与え，心身の健康維持にも悪影響を及ぼしかねない。孫の面倒をみる祖父母の場合は，必要な知識や情報の入手と同時に，特有の心理的葛藤を克服していく共同の「場」も必要となる。

以下，III章では同様の境遇にいる祖父母同士の相互扶助活動を通して集団によるサポートの方法と展開を検討していく。

III 祖父母同士のサポート・グループ

A サポート・グループの特徴

「孫の親権者」という役割に伴う葛藤やストレスに直面する祖父母同士の相互扶助的な活動が1990年代以降，全米規模に拡大している。個々人が葛藤やストレスを内面化しないように集団で問題を話し合う機会を設けることが祖父母にとって，究極的には孫にとっても有益となる。

個々人が共有課題の解決を指標に集団で協力することで個人の力量では困難な課題の克服を可能とする。こうした集団の生みだす相乗効果に関する理論として「グループ・ダイナミックス」が挙げられる。「グループ・ダイナミックス」では，“個々人が集団として効果的または非効果的にいかに機能するかを研究”の対象としている。集団に特有の利点として，“個人より情報量が多く，価値観も多様である。メンバー間の信頼関係が構築されるにつれメンバーの会合への参加率や満足感も高まる”こと，さらに効果的なグループワークの要件として，“参加者全員と関連のある討論をすること，解放的な雰囲気と相互の信頼関係が存すること。意見や感情を自由に表現でき，協力的で親しみ易く支えあう環境が整っていること”[30]などが挙げられている。

グループワーク理論を体系化させたI.ヤロムは，サポート・グループの利点として以下の点を強調している。

1．「共通項の発見」―他者も自己と同様の感情（恐怖感，絶望感から立ち直れないのではないかと

いう感情）を共有していることが救いとなる。

2．「孤独感の緩和」—グループ内で他者と親密な信頼関係を築けると，自己の孤独や不安を自由に話せるようになる。

3．「ソーシャル・スキル伝授の場」—ソーシャル・スキルの中枢は他者とのコミュニケーション能力にある。メンバー間でリスニング・スキルの練習や適切な質問の仕方を学ぶ機会を持てる[31]。

高齢者を対象としたグループワーク理論を研究しているバーンサイドによると，「グループの結束力」，「課題の普遍性」，「メンバー間のインプットとアウトプット」，「自己認識」，そして「希望の付与」が特に高齢者グループには効果的であるという。バーンサイドは，周囲との相互関係を失いがちな高齢者にとって特定のグループに一体感を覚え，仲間意識を育むことの重要性や他のメンバーが喪失や病気などの危機にいかに対処してきたかを聞くことで自己の環境に適応していくよう鼓舞される[32]ことなどを重要視している。

人生設計の予期せぬ変更を強いられる祖父母にとって新たな生活に対応するのに必要な知識と情報を入手し，自らの心情を吐露できる場での交流を将来の望みへと結び付ける意義は多大である。

B 「祖父母の会」(Grandparents As Parents)の活動

A節では，孤立しがちな高齢者に集団活動が及ぼしうる効用性について概観した。以下B節では，祖父母同士のサポート・グループの展開を具体的事例に基づき検討する。

サポート・グループは，その目的や課題により二種類に区分される。一つは体系的なセルフ・ヘルプ・グループの原点と言われている「アルコール依存症更生会」(AA, Alcoholics Anonymous)など物理的障害を克服するグループ，そしてもう一つは，メンバーに共通する特定の人生の危機（病気，エイジング，配偶者や子どもの死など）を克服するためのグループである[33]。

本論で着目している祖父母たちは，後者の中でもさらに限定された集団となり，狭義の「ピア」（同質の体験に基づくストレスや葛藤を抱えている仲間同士）に該当する。こうした祖父母たちが自主的に立ち上げたサポート・グループ[34]の内，既に全米規模に活動網が拡張している「祖父母の会」(Grandparents As Parents, 以下，GAPと略す）を例に祖父母たちの活動をみていく。

GAPという名称のサポート・グループは1987年に社会臨床士，S.トレド氏が立ち上げた。トレド氏は，みずからの両親が孫の世話に苦慮している状況を目の当たりにし，同様の難題に直面している祖父母たちの一助となるためにグループを創設した。

“こうした状況の高齢者は伝統的な祖父母役割を奪い取られてしまったと感じている。子どもたちにとってもその役割を失ってしまうこととなる。「グランド」（一親等隔てた）という言葉は，双方の世代から奪われてしまう。”とトレド氏は述べている。

こうしたグループは通常月に一度，コミュニティ内のシニアホール等に数名から十数名が集い，話し合う。会合にはメンバーの問題に専門的な知見を提供するために心理学者，ソーシャルワーカー，法律家などが招聘される。月刊誌も発行し，情報交換をしている。トレド氏は，他地域で新たに創設される会への助言指導も行なっている。グループのメンバーはそれぞれ新たな役割への適応段階が異なるため経験豊かなメンバーから情緒的サポートを受けられる。

祖父母たちは人生の新たな挑戦に以下のような憤りや戸惑いを隠しえない。

“政府は予算を麻薬対策やリハビリテーションセンターの新築に注ぎ込んでいる。しかし，実際は，刑務所を避けるためにセンターを利用する麻薬常習者も中にはいる。(略)こうした予算を隠れた真の犠牲者である常習者の子どもたちやその養育者に配分できないだろうか？”

祖父母と同様に孫の置かれている特別な状況にも配慮せねばならない。ある祖母は，“本当に心の支えになっているわ。会に参加するようになって，また笑い方を思い出したわ。孫たちの助けにもなっているの。孫たちは自分たちが友人と同様の普通の生活を送れないことに疑問を感じている。この会合に同席することで祖父母と生活しているのが自分独りでないことに気づいていく。”と孫への影響を述べている。

祖父母が学校行事に参加すると，“親が年を取っている”と友人にからかわれ，自分の家庭が特殊であるという不安を高め，学業的・精神的にも悪影響を及ぼしてしまうこともある。

同世代の友人に他の選択肢がないのに“孫の養育には年を取り過ぎている”と言われ，孫を同伴することに理解を示してくれないと嘆く祖父母もいる。

経済的な問題として，成人した子どもたちが祖父母に再依存してくることも多々ある。孫の親権を取得するための法定費用も必要となる。養父母のケースと異なり，実の孫の養育には連邦政府ならびに州政府からも小額の援助金しか支給されていない。

こうした状況を踏まえ，トレド氏らは現状に即した連邦政府，州政府レベルでの法制度，福祉制度の改善を提唱している[35]。

こうしたグループ活動を通して以下の利点や課題が明らかになったといえよう。

GAPの活動でも明白なように，孫の養育に必要な情報入手に加え同質の課題を抱えているからこそ可能となる相互扶助を通して，「情緒的支援」“思いやりや愛情を示すこと”[36]を授受し合える。

祖父母たちは自身の子どもの問題行動に起因して，親の代行を務めるケースが大半なため，コミュニティ内で疎外され孤立しやすい状況にいる。特に未だに三世代の同居率が他民族に比して高いアフリカ系アメリカ人や地方都市でこの傾向が強いという[37]。したがって，ピアとの交流により祖父母のみならず孫も自分たちの家庭状況が特殊でも異質でもないことを認識すると，安心感と自己尊厳の回復が可能となっていく。会合に招かれる専門家たちの多くも同質体験を有するため個々人の状況に即した個別具体的な助言も受けやすい。特に親権確保の法的手続きは複雑なうえに，親権の取得には自分の子どもが孫の親として不適切であることを法廷で証明せざるをえないケースもあり，祖父母にとって精神的負担が大きいという[38]。

一方，祖父母たちの活動を成功裡に展開するための留意事項も指摘されている。ストロムらは，ピア同士の活動が祖父母や孫たちに及ぼす効用性を評価しながらも祖父母世代は，コミュニケーションを重視した学習体験に乏しいためピア同士の生産的な対話へと発展させる技量に欠けると指摘している[39]。さらにピア・グループの陥り易い否定的効果について以下の点に注意を喚起している。

サポート・グループはメンバー同士の不平不満に寛容になりがちなため，結果的に参加者の成長の機会を奪ってしまうことがある。祖父母たちは失望感を躊躇せず表現することがストレスの解消に役立ち，最適の聴き手はピアと信じている。こうして，参加者の中にはピアのみが自己の心情の理解者であると確信し，特定の問題を集会でしか語らなくなってしまう。こうした態度は，親戚などとの付き合いを疎遠にさせ，社会から益々孤立してしまう。自分の立場を理解してもらうべき相手は家族，とりわけ孫自身であることを忘れてはならない[40]。

このような継続性のあるピア活動を肯定的なサポートに結実させるためにはメンバー間の秩序，モラル，そして特有のスキルの習得が要請される。こうした課題解決型のピア・グループで最重要視されるスキルが，他メンバーとのコミュニケーション能力であり，コミュニケーション能力の向上に必要なのは，リスニング・スキルの育成である。

特に祖父母たちの大半が他者に語りづらい事情をかかえているためグループワーク初期の段階における「能動的なリスニング」についての共通認識が重要となろう。受動的なヒアリングと異なる「能動的なリスニング」には聴き手のいかなる姿勢や対応が求められるのだろうか。世代間の相互関係の構築を目指すプログラム参加者へのハンドアウトによると，リスニングの要件として“他者の価値観を尊重し，自分の期待や価値観をおしつけたり，相手の話を分析してはいけない。非言語的なメッセージにも注意を払う”などが挙げられている[41]。

リスニング・スキルは，グループ全体の調和と共感形成のための鍵となるスキルといえよう。グループワークにおける自己表現の場で他者に心を開く姿勢が孫との関係にも好影響を及ぼしうる。“青少年は，同じ話しの繰り返しを知的能力の衰退と結び付けやすい”[42]ということをみずからがピアの話しの聞き手側に立つことで自覚しうる。こうしたグループ活動を通して他者との信頼関係を築いていくプロセスが孫とのコミュニケーションの活性化にもつながろう。

IV　考察―祖父母教育とサポート・グループの可能性

以上，親役割を担う祖父母の現状と課題解決に向けた取り組みを祖父母教育とサポート・グループの展開から検討してきた。本論を通して明らかになった事実，着目点，そして課題を以下考察する。

高齢者は，それまでの人生の社会的・心理的・経済的諸要因が生活に反映するため異質性・多様性に富む年齢集団となる。本論で検討してきた祖父母たちは，新たな役割の獲得により孫の養育・教育責任を負い，経済的・社会的に不利益な立場に立たされ，通常の高齢期に至るプロセスで克服すべき心理的・社会的課題とは異質の課題に挑んでいく。したがって余暇充実型の生涯学習，あるいは親世代への「子育て支援」的な教育とも異なる特有の学習課題を有している。

こうした背景を受けて，祖父母たちが自己の役割に意義を見いだし，孫の養育に必要な情報や知識を入手し，新たな生活への適応を促進する教育的アプローチ，「祖父母教育」をまず検討した。

これまで高齢期の学習では余暇活動，文化活動などの自己充足型が重視されてきたが，本論では第三世代の教育責任を有する祖父母たちを視座に入れた新たな教育的

介入モデルを検討してきた。「祖父母教育」は，高齢者を対象とした教育プログラムに新たな視点と柔軟な対応の必要性を示唆している。今後は高齢者向けの生涯学習プログラムもより多様なニーズに応じた展開が必要となろう。ストロムらが祖父母たちの新たなニーズに呼応して研究と実践を一体化させているように課題解決型の学びには背後に潜む社会問題への敏速な対応が求められる。

祖父母世代の問題は中間世代，そして孫世代と全世代の抱える問題と表裏一体であり，家庭，学校そして社会全体の問題を投影している。祖父母一人一人の力量形成は，間接的に次世代を担う青少年の健全な心身の発達と成長にも影響する社会全体の課題である。

配偶者や親しい友人との死別を避けられない高齢者にとって，みずからの心情を語り合える仲間を有することは精神的安定につながろう。加齢に加え，特殊な家庭事情によりコミュニティ内で孤立しがちな祖父母を放置しておくと孫にも否定的な影響を及ぼしかねない。したがって，こうした状況を社会全体の課題として善処していくサポート体制が求められている。

本論で検討した課題解決型のピア・グループでは，専門家と質の異なるサポートをメンバー間で自発的・双方向的に授受しあう関係性を重視する。したがって，グループ全体を主導するピア・リーダー，そしてメンバー一人一人の姿勢がグループ全体の雰囲気と成功を左右する。この種のサポート・グループはコミュニティの規模や特性に適した形態で既に全米に広がっている。その理由としてコミュニティ単位の小規模なサポート・グループとその中枢となるグループとの情報交換，ノウハウの伝授などの連携が取られていること，各種団体（青少年団体，高齢者団体，福祉団体，医療機関など）への照会体制が整備されていること，非営利団体を中心にモデル・グループを設立し，そのノウハウをグループ関係者や参加者に伝授する機会を設けていることなどが考えられる。

祖父母が新たな役割を前向きに受容し，適応していくには，祖父母自身の意識改革を促し，祖父母の葛藤を分かちあう場が必要となる。そうした場の創出には，大学や研究機関，そして非営利団体の積極的な参与と協働体制が求められる。

長期的視野に立った孫との良好な人間関係の形成には祖父母世代のそれまでの価値観を変容していく柔軟性と努力が要請される。そうした生きた学習がグループワークにおいて可能となる。心身の健康に恵まれた高齢者にとって自己の智恵や経験を再度活用できる役割を任され，他世代に貢献できることは，自己満足感・自己充足感などの効用性をもたらしうる。

この祖父母たちの新たな挑戦を全世代に関係する課題として捉え，祖父母たちを社会的・心理的にサポートしていく体制造りが課題となろう。同時に青少年，成人，高齢者とライフサイクル上の区分のみに終始する学習内容にとどまらない課題別の柔軟な教育的プログラムを考案していく好期ともいえよう。特に米国では，こうしたプログラムが参加者に及ぼす効用性に関する検証結果の積み重ねが民間団体からの資金援助の確保，さらには公的な政策提言へと直結していく。ここに先行する社会的ニーズに対応した教育的介入や実践が行なわれ，その検証結果を公的な政策やプログラム開発に反映させていく市民主導による課題解決型活動のプロセスが見受けられる。サポートの質の向上にも行政機関，民間レベル，そして研究機関などの連携と協働が必要不可欠となる。このように益々多様性に富んでいくニーズに応じた重層的なサポートシステムが構築されていく可能性を祖父母のケースは示している。

祖父母の直面する課題は，「家族」のあり方という個々人の価値観にとどまらず社会全体で青少年世代の成育環境を整備していくこと，青少年の成長に関与する親世代，そして祖父母世代という各世代の「生活の質」の維持・向上に必要なサポートの方法や政策のあり方など現代社会の構成員全てに関わる問題を教育関係者，福祉関係者，政策担当者，法律家，そして市民一人一人に問いかけている。

おわりに一今後の課題

日本においても少子化，核家族化，さらに受験戦争の激化などから子育て不安・困難を抱える母親の増加が社会問題化している。そうした中，必ずしも血縁の有無に限定しない「地域社会」という枠組みにおいて高齢者の経験を再活用しようという取り組みが展開しつつある。

国の政策動向を鑑みると，厚生労働省が少子化対策（次世代育成支援対策）への取り組みとして「次世代育成支援対策推進法案」及び「児童福祉法改正案」を平成15年3月，国会に提出し，同年7月「次世代育成支援対策推進法」及び「児童福祉法改正法」が成立した。その柱として，少子化現象の一要因である子育て困難への支援策として家庭や地域社会における「子育て機能の再生」の実現を「もう一段の少子化対策」として推進していくことを掲げている[43]。

民間レベルでもNPO法人を主体とした「地域三世代子育て支援」の取り組みが地域単位で全国的に普及しつつある[44]。「ミニディ」（高齢者あるいは障害者を対象とした在宅福祉サービス，ディサービスのミニ版）[45]を中心とした取り組みが主流で，本論の祖父母の担う役割とは異なるが，世代間の円滑な交流を目標とした教育的プログ

ラムも考案され始めている[46]。

今後，血縁の有無に限定しない地域三世代（四世代）教育という新たな視座を含めた二十一世紀型の世代間の支援体制を整備していく過程において，中間世代の問題行動により家庭の教育能力の低下という社会問題が顕在化している米国における祖父母たちへの教育的・集団的アプローチは示唆深いと考える。

今回言及できなかったが，教育プログラムやピア・グループ参加者の縦断的な質的調査により祖父母自身のエンパワーメントや孫との関係性の変化など集団での「学び」がその後如何に日常生活に反映されていくのか，さらにそうした検証結果のフィードバックに基づくカリキュラム開発・編成などの分析に取り組んでいきたい。

注釈

1） Brown, Laura Hess, "Intergenerational Influence on Perceptions of Current Relationships with Grandparents," *Journal of Intergenerational Relationships*, The Haworth Press Inc., 2003, pp.95-96.

2） Jones, LaNeice and Kennedy, Jerutha, "Grandparents United: Intergenerational Developmental Education," *Child Welfare*, Vol.LXXV, #5, September-October, 1996, p.640.

3） 世代間の有機的統合を指標に米国で1986年に設立されたNGO機関，「ジェネレーションズ・ユナイテッド」(Generations United) の調査によると，孫の養育義務を負う祖父母数は1990年から8年の間に53%も増加しているという。[Generations United, *Profile of Generations United*, Washington DC, 2001.]

4） Power, Maureen and Maluccio, Anthony N., "Intergenerational Approaches to Helping Families at Risk," *Generations: the Journal of the American Society of Aging*, Winter, 1998-1999, p. 38.

5） Roe, Kathleen M. and Minkler, Meredith, "Grandparents Raising Grandchildren; Challenges and Responses," *Ibid*., p.25.

6） Rosow, Irving. 『高齢者の社会学』〔*Socialization to Old Age*. California, The University of California Press. 1974〕嵯峨座晴夫監訳，早稲田大学出版会，1983，p.32.

7） 当時，三世代家族内の世代間の関係を端的に示す知見として，三世代研究で著名なR・ヒル(Hill)の"老世代は依存的，親世代はパトロン的，子世代は互酬的"という命題が認知されていたという。〔春日井典子『ライフコースと親子関係』行路社，1997，p.36.〕

8） Jendrek, Margaret Platt, "Grandparents Who Parent Their Grandchildren: Effects on Lifestyle," *Journal of Marriage and the Family*, 55, 1993, pp.612-614.

9） Morrowo-Kondos, Diane, Weber, Joseph A, Cooper, Kathy and Hesser, Jenny L. "Becoming Parents Again: Grandparents Raising Grandchildren." 〈Brabazon, Kevin and Disch, Robert. *Intergenerational Approaches in Aging*. The Haworth Press, 1997〉 p.35.

10) Kropf, Nancy P. and Burnette, Denise, "Grandparents As Family Caregivers: Lessons for Intergenerational Education," *Educational Gerontology*, Vol.29, 2003, p.362.
また，2000年度の人口調査によると，全体の約8.4%に該当する米国の子どもたちが親ではなく親戚と暮らしている。その内，約四分の三に当たる子どもたちを祖父母たちが世話している。つまり，全体の約6.3%にあたる450万人の子どもたちを230万から240万人の祖父母たちが世話していることになるという。引用箇所は，Bryson, K.R. (2001, Nov.) *New Census Bureau data on grandparents raising grandchildren*. Paper presented at the 54th Annual Scientific Meeting of Gerontological Society of America, Chicago; IL.より重引。

11) *Ibid*., p.362.
なお，両親ともに健在の家庭で育つ子どもの率は，約86%（1950年）から70%（1990年代半ば）に減少している。母親がエイズに感染している子どもたちの大多数も祖父母にひきとられることとなる。投獄される女性の数も1997年の司法省の統計によると，この十数年間に六倍に増加していると報告されている。[Roe and Minkler, *op. cit*., pp.26-27.]

12) *Ibid*., p.366.

13) I. ロソー, *op. cit*., p.35.

14) Strom, Robert D. and Strom, Shirley K., "Grandparents Raising Grandchildren: Goals and Support Groups," *Educational Gerontology*, Volume 19, 1993, p.706.

15) American Association of Retired Persons (AARP). *Developing Bereavement Support Groups: A Guide for New Leaders*. Washington DC, 1999, p.26.

16) Kropf and Burnette, *op. cit*., p.365.

17) Stevenson, Jack L. and Wright, Paul S. "Group

Dynamics." 〈Hawkins, Melissa O., McGuire, Francis A. and Backman, Kenneth F. eds. *Preparing Participants For Intergenerational Interaction: Training for Success*. The Haworth Press, 1999〉 p.131.

18) Ward, Christopher R. "Research on Intergenerational Programs." Newman, Sally, Ward, Christopher R. Smith, Thomas B., Wilson, Janet O. and McCrea James M. *Intergenerational Programs Past, Present, and Future.* Taylor & Francis, 1997〉 p.137.
引用箇所は，Minkler, M. and Roe, K. (1993). *Grandparents as caregivers: Raising children of the crack cocaine epidemic*. Newbury Park, CA: Sage Publications. より重引。

19) Strom, Robert D and Strom, Shirley K. *Becoming a Better Grandparent: Viewpoints on Strengthening the Family*. Sage Publications, Newbury Park, California, 1991, p.4.

20) Strom, Robert D. and Strom, Shirley K., "Grandparent Education: Improving Communication Skills," *Educational Gerontology*, *op. cit*., p.719.

21) ストロムらの祖父母教育に関連する書籍は以下を参照。
Strom, Robert D. and Strom, Shirley K. *Grandparent Education: a Guide for Leaders*. Sage Publications, 1991.
Strom, Robert D. and Strom, Shirley K. *Achieving Grandparent Potential: a Guidebook for Building Intergenerational Relationships*. Sage Publications, 1992.

22) Takas, Marianne. *Grandparents Raising Grandchildren: A Guide Finding Help and Hope*. Brookdale Foundation, New York, 1995.

23) Strom and Strom, "Grandparents Raising Grandchildren," *op. cit*., p.706.

24) ストロムの祖父母教育のクラスは，アリゾナ州立大学の主催により近隣のシニアセンターにおいて「祖父母役割の探求」という題目で週に一度，1セッション90分で計10セッション催された。参加者の年齢，民族，収入レベルは多様性に富んでいる。
詳細は，Strom, Robert D. and Strom, Shirley K. "Redefining the Grandparent Role," *Office of Parent Development International Research and Development Reports*. Arizona, 1982. pp.3-13.を参照。

25) Waddock, Sandra A. and Freedman, Mark, "Reducing the Generation Gap and Strengthening Schools," *Generations, op. cit*., p.55.

26) McCrea, James M. and Smith, Thomas B. "Social Issues Addressed by Intergenerational Programs." Newman, Sally, et al, *op. cit*., p.37.

27) 今日では，4人に1人以上の子どもたちがシングルペアレントの家庭に生まれている。1980年代には，両親不在の家庭数が倍増し，40%に近い青年が父親不在の家庭で成育している。幼い子どもを抱える女性の約三分の二が仕事（大多数がフルタイム）に就いている。[Waddock, Sandra A. and Freedman, Mark, "Reducing the Generation Gap and Strengthening Schools," *Generations, op. cit*., p. 55.]

28) 青少年と高齢者との交流が両世代に及ぼす心理的効用性については米国で設立し，展開されている「世代間プログラム」(Intergenerational Program) を通して多数検証されている。例えば，同プログラム研究の第一人者，サリー・ニューマン (Sally Newman)は，「第一回ユネスコ世代間プログラム国際会議」(the first International Conference of Intergenerational Programmes, 1999) において青少年と高齢者の双方向的な関係が両世代のニーズの充足に寄与すると報告している。詳細は，Hatton-Yeo and Ohsako, Toshio eds., *Intergenerational Programmes: Public Policy And Research Implications: An International Perspective*. The UNESCO Institute for Education & The Beth Johnson Foundation, 1999, pp.57-61.を参照。

29) Strom and Strom (1982) *op. cit*., pp.6-9.

30) Stevenson and Wright. *op. cit*., pp.130-131.

31) AARP, *op. cit*., p.4. 引用箇所は，原著 Yalom, Irving. *The Theory and Practice of Psychotherapy*. 1995, New York, Basic Books. からの抜粋。

32) Burnside, Irene. "Principles of Yalom." 〈Burnside, Irene and Schmidt, Mary Gwynne eds., *Working with Older Adults*. 3rd ed., Boston, Jones and Bartlett Publishers, 1994〉 pp.52-53.

33) Burnside, Irene. "Support and Self-Help Groups." *Ibid*., pp.204-205.

34) ここ数年の間に孫の世話をする祖父母のためのサポート・グループが何百も立ち上げられている。その具体例として，Grandparents as Parents, Grandparents Raising Grandchildren, Second Time

Around Parents, Our Children's Kids などが挙げられる。[Strom and Strom. "Grandparents Raising Grandchildren," *Educational Gerontology, op. cit.*, pp.710-711.] 引用箇所は Minkler M. (1993). *National organizations for grandparent caregivers underway*. Brookdale Grandparent Caregiver Information Project Newsletter, 2(2), 1, 2,6.より重引。

35) AARP, "Grandparent: Redefining The Role," *Modern Maturity*, December 1990-January 1991, Washington DC, pp.31-36.

36) 社会的支援は内容により，「情緒的支援」「手段的支援」そして「情報的支援」に分けられる。〔清水裕"高齢者の援助とサポート" 高木修監修・西川正之編集『援助とサポートの社会心理学―助けあう人間のこころと行動』北大路書房, 2000, p.28.〕

37) Roe and Minkler, *op. cit.*, p.27.

38) Flint, Margaret M. and Perez-Porter, Melinda. "Grandparent Caregivers: Legal and Economic Issues." Brabazon et al, *op. cit.*, p.65.

39) Strom and Strom, "Grandparent Education: Improving Communications Skills," *op. cit.*, p.717.

40) Strom and Strom, "Grandparents Raising Grandchildren," *op. cit.*, pp.710-713.

41) Stevenson and Wright, *op. cit.*, p.153.

42) Strom and Strom, "Grandparent Education: Improving Communications Skills," *op. cit.*, p.724.

43) 「少子化の現状と次世代育成支援対策について」厚生労働省雇用均等・児童家庭局　少子化対策企画室長，吉岡てつを氏，講演（社団法人長寿社会文化協会（WAC）主催「地域三世代子育て支援研修会」平成15年9月11日）レジュメ，p.14.
政府側の少子化問題への対応策を鑑みると，『少子化の流れを変える』ためのもう一段の対策（次世代育成支援対策）の推進に向けて，従来の「子育てと仕事の両立支援」に加え，"①男性を含めた働き方の見直し，②地域における子育て支援，③社会保障における次世代支援，④子供の社会性の向上や自立の促進"という新たな視点を取り入れている。〔吉川てつを，前掲レジュメ，p.12.〕

44) 例えば社団法人長寿社会文化協会（WAC）『ミニディを活用した地域三世代子育て支援マニュアル―地域を耕し，地域を培うコミュニティの創設―』2003.においては，全国規模で展開されている「ミニディ活用の子育て支援」の事例や「多世代子育て」の支援事業についての報告がなされている。

45) 岡村清子・町野美和"ミニディ活用の子育て支援が地域を耕し，地域を培う"社団法人長寿社会文化協会，*Ibid.*, p.6.

46) *Ibid.*, p.7.ミニディ活用の子育て支援では，ある施設を"高齢者のみ，障害者だけという特定の人々だけが利用する場とするのではなく，子育て支援を旗印に世代を越えた多様な人々の交流の場"とし，"年齢，健康状態，発達状態などで画一的に区分せず，誰でも受け入れていく可能性にみちた，1人1人を大切にした統合型のケア"を目指している。